

加藤 登紀子

歌手・国連環境計画（UNEP）親善大使

日本はとっても豊かな自然のある国、だと思います。

水辺の美しさ、森の深さ、川の水音に、どれほど救われて来たことでしょう。

けれど、一九六〇年代以後、急激な生活の変化で、自然が大きく変わって来ていることに、誰もがしっかりとした自覚を持たなければいけない時にさしかかっています。

水辺を遠くながめることから、一步二歩近づき、水辺の中に生きるものたちの側に身を寄せてみる。岸辺の浅瀬で子を産み育てる魚たちにとって心地よい住み家は守られているか。目に見える美しさだけでなく、健全な水源が保たれているか。川の中は、海の中は今、どうなっているのか。人の暮らしとの接点に責任を感じ、生命としての人のあり方を呼び戻すこと、それがエコツーリズム。

森の中を歩き、深呼吸する楽しみから一步二歩、土や、鳥や、木や花に近づいてみる。

人の生命よりもはるかに長い時間がそこにあり、生から死へ、死から生へのたくましい再生の秘密がかくされていることに気づく。

植えられた木は、きちんと世話されているか。激しい生命の戦いの中でバランスがくずれ枯れていくものもある。森は今、生きているか。

人の生活を支えている木や水や土の貴重さを身をもって感じ、自分自身の暮らしに新しい目をむけるチャンス、それがエコツーリズム。

これまでの観光が、日常を忘れ、ちょっとした贅沢を味わう消費三昧の旅だったとすれば、エコツーリズムは自然の成り立ちを知り、私たちの生命の秘密を知り、少しでも自然を守っていく仕事の一翼を担うよろこび。近代的な生活が忘れようとしている歴史の中の文化や知恵に触れるよろこび。いろんな生き物と共生し、家族や友人との共同作業するよろこび。

たくさんの発見と感動を得ることが出来る、そんな旅であるだろう。

けれど、エコツーリズムが正しく行われるためにはエコツアーに参加している人々の自覚、そしてそれをむかえ入れる業者の大きな努力が絶対条件だ。そのための法的規制が当然必要となる。

自然のためには、人々がそこに足を踏み入れること自体に破壊的な影響があることを肝に銘じなくてはならないし、人々が動き活動することによるエネルギーや水の消費をどのように減らし、出来る限り循環させていくのか、そのシステムの確保が急務

だ。

エコツーリズムが日本の自然を回復していく一助となることを切に望みたい。